



子ども・教師・社会のウェルビーイングの ネクスト・ステージへ



大学院教育学研究科長
高瀬 雅弘

近年まれに見るほどの豪雪に見舞われた冬を乗り越え、この春に教職大学院には第9期生20名が入学しました。また新たに3名の教員が加わりました。

弘前大学は、今年1月に「地域中核・特色ある研究大学強化促進事業（J-PEAKS）」において、提案した「グローバル Well-being 共創社会を実現する異分野融合型総合知による革新的卓越研究大学群の構築」が採択されました。今やウェルビーイングは弘前大学共通のキーワードです。教職大学院では、一昨年度から「教師のウェルビーイング」をテーマにした組織的研究を進め、今年度はその集大成の一年になります。この間、次世代ウェルビーイング研究センターと併せ、学内においていち早くウェルビーイングをテーマとした研究に取り組んできたことは、学部・教職大学院が誇りとするところです。

そしてウェルビーイングをテーマとした研究は次のステージへ進んだといえます。ではここに至って私たちが考えるべきことは何でしょうか。超人口減少社会のもとで教員不足が深刻化するなか、学部レベルでも複数免許の取得が推奨されるなど、マルチタスクをこなせる人材が求められています。他方で教員の労働時間の管理も依然として課題であり続けています。この矛盾しているかのような状況下において、私たちは教育の近代モデルからの脱却を図らねばなりません。それは学校や教師は「何をすべきか」ということの臨界点を認識したうえで、「できること」と「できないこと」を腑分けするということです。これこそが教師のウェルビーイングの実現にとって不可欠な要素だと私は考えています。

このことは、単に学校や教師の側の努力だけで実現するものではありません。教育に多くを求めすぎる社会の側にも自制が必要です。だからこそ、教職大学院にはこれまで以上に社会への発信力と訴求力が必要になります。学校という枠組みを超えて社会とつながるために、全学を挙げて、組織や領域を横断する形で取り組む J-PEAKS 事業は何よりの好機といえます。このチャンスを逃すことなく、教育学というハーケンをもって、子どもと教師、そして社会のウェルビーイングの頂を目指して、あくなき登攀を続けていきたいと思えます。

大学院教員を校内研修会等で**無料**でご活用ください！

教職大学院では、本大学院教員を無料（授業期間中は原則として火・木曜日）で、青森県内の小・中・高・特別支援学校の校内研修会や各教育研究会、各教育委員会主催研修会等に講師として派遣する活動を行っています。

この活動は、本大学院の現職教員院生が、講師の大学教員に帯同して研修会等に参加させていただくことで、研修会等の運営の仕方を学ぶこと等を目的とし、本大学院の実習の一環として行われることにより無料としております。本大学院教員が助言や指導を担当できるテーマや内容については、本大学院のホームページ（「弘前大学大学院教育学研究科」で検索）の「教職大学院教員を講師等としてご活用ください」をご覧ください。

講師派遣の申込方法は、同じホームページの「講師派遣（実習ⅡA）申込み票」から、A4判申込用紙に必要事項を書いてFAXする、または担当宛メールを送信するだけです。研修会開催後の報告書等の提出も不要です。

申込は随時（来年1月頃まで）受け付けますが、早めにお申込みをいただくことで期日の調整がスムーズに行え、皆様のご希望に添うことができます。ぜひ、ご活用ください。



2026年度の教職大学院の入試について

2026年度の新たな院生を迎える入試を以下の通り実施します。（第1期・第2期の日程が昨年度より早くなっていますので、ご注意ください。）

第1期・・・推薦特別選抜・一般選抜：9月6日（土）

〔出願期間は7月18日（金）～7月25日（金）、説明会は7月16日（水）午後4時〕

第2期・・・推薦特別選抜・一般選抜：11月8日（土）

〔出願期間は10月6日（月）～10月10日（金）、説明会は9月24日（水）午後4時〕

第3期・・・一般選抜：12月20日（土）

〔出願期間は12月1日（月）～12月5日（金）、説明会は11月26日（水）午後4時〕

なお、合格者の合計が募集人員に達した場合、それ以降の募集を実施しないことがあります。

＊詳しくは、本学ホームページの入試情報をご覧ください。



NITS 弘前大学センター 指導主事研究会
～新しい時代の学校づくりを支えるために～

6月28日（土）
9:50～15:30

今年度は、前加賀市教育長の島谷千春氏（現 NITS 審議役）をお迎えします！

「自分で考え 動く 生み出す そして社会を変える」子どもたちの育成に向けて、従来の画一的な教育から一人ひとりの可能性を伸ばす教育へと転換し、全国から注目される加賀市。その取組を可能にした教育行政のありようを語っていただきます。

弘前・八戸・オンライン3会場のハイフレックス開催。

詳しい情報・お申込は ➡ <https://www.edu.hirosaki-u.ac.jp/gs/application-form.html>



新任教員紹介

柿崎 朗 教授



この3月に青森県立青森第二高等養護学校長を普通退職し、本教職大学院に着任いたしました柿崎 朗（かきざき あきら）と申します。これまで経験してきました小学校や特別支援学校、教育行政におきまして、障がいのあるなしにかかわらず、一生懸命に活動する子供たち、そして、そのような子供たちを温かく、かつ大切に指導・支援してくださっているたくさんの先生方にお会いすることができました。また、学校にさまざま協力いただいた保護者の皆様や地域の方々の姿も決して忘れることができません。今回、青森県のみならず日本各地の教育に少しでも貢献できる機会を与えられましたことに感謝し、後進の育成等に微力ながらお手伝いしたいと思っています。

院生の皆さん、実習先の子どもたち、学校の先生方などの関わりの中で、すべての方々が充実した時間を過ごし、成長を実感できるよう取り組んでいきましょう。どうぞよろしくお願いいたします。

田澤 和康 准教授



この4月に、下北地区の青森県立大湊高等学校教頭から、実務家教員として教職大学院に参りました。現人文社会科学部を卒業し、その後現人文社会科学部研究科を修了した者として、学部は違えども母校に勤務できる喜びとともに、その責任の重さを深く感じております。

私は、弘前大学を出てから青森県内各地の県立高等学校に勤務してきましたが、東青・西北・中南・上北・下北・三八の県内6地区のうち、西北を除く5地区の高等学校に、勤務年数の長短はありますが在職しました。青森県内各地の高等学校教育に従事した経験を生かしながら、教職大学院の更なる発展を目指してできる限りのことに取り組んでいきたいと思っています。とは言っても、これまでの高等学校とは勝手の違う大学での業務となりますので、皆様にはさまざま指導ご鞭撻を賜りますようお願いします。

ここ教職大学院で実践研究に励まれる院生の皆さんは、修了後青森県はもとより日本全国教育界で活躍されることになるはずで、そうした皆さんが、教育者としての力量を高めていくのに少しでもお力になればと思っています。何卒よろしくお願い申し上げます。

長尾 悠里 助教



この4月に着任しました、長尾悠里と申します。「学校の存否・在り方と、地域の存否・在り方には強い関係があるのではないか」という関心の下、学校と地域の双方を見据えた研究を行ってきました。本大学院では、教育行政・教育経営領域の授業を担当いたします。

現在、地域と学校のどちらをみても、それぞれに苦しさを抱えております。青森県を含む地方をみれば、自治体の「消滅」さえ囁かれるほど、人口減少に悩まされています。学校をみれば、「働き方改革」が求められるほどの業務量の下、一人ひとりの教師が多様な育ちの子どもたちと向き合っている状況です。このような現状にもかかわらず、青森県で、そして学校現場から地域の教育を支えている教師のみなさまを、心から尊敬します。そして、私自身も本大学院において、自らの知見を地域や学校に還元するとともに、「自律的発展力」「協働力」「課題探究力」「省察力」を兼ね揃えた教師を養成することで、学校現場に貢献することを目指します。どうぞよろしくお願いいたします。

入学院生からのメッセージ

葛西 健介（深浦町立深浦中学校）



教師と生徒の学びは相似形である。とある研修でこの言葉が心に刺さりました。「こんな風に成長してほしい」と、生徒に求める姿があるならば、そもそも我々教員がその相似形として範を示すべき。

つまり、教員も生徒と同様に学び続けなければいけない。

教職大学院への進学を決めたのは、一生懸命に勉強に励む目の前の生徒たちに誇れるように、私も勉強したいと思ったからでした。現場を離れることに関しては、勤務校の生徒や先生方への申し訳なさもありました。これから学ぶ多くのことを後に現場で役立たせていくことで、恩返ししたいと思っています。教職大学院での日々を実り多い時間にできるよう、毎日全力で学び、レベルアップしていきます。

工藤 愛美（弘前大学教育学部附属小学校）



小学校教員として経験を積んでいく中で、教育について改めて捉え直し、自分自身をアップデートしたいという思いをもつようになり、教職大学院への入学を決めました。入学してからは1日があつ

という間で、課題に追われながらも新たな発見や学びの多い日々を過ごしています。また、他校種の先生方やストレートで進学した院生の皆さんとともに学ぶことができる教職大学院は、自分にはなかった多様な視点を得ることができ、とても新鮮に感じています。この貴重な機会を通して、理論や事実をもとに考える力や、課題解決へ向けて物事を捉え直したり省察したりする力を身に付け、教育現場に還元できるよう自分を磨いていきたいと思っています。

櫻庭 レミ（弘前市立東目屋中学校）



ここ数年は仕事と子育てに追われ、目の前の業務を効率よくこなすことに重きを置いていたように感じています。それと同時に、教員としての自身の立場の変化や力不足を感じるようになっていま

した。そのなかでの教職大学院のお話は、もう一度じっくりと時間をかけて教育について考え、さらに

自身を高める良い機会になると思い、進学を決意しました。大学院での学びは、教育に関する理論などを深く学び直し、これまでの自身を振り返り、さらに新たな気付きや視点を与えてくれるものばかりです。この学びをミドルリーダーとしての自身の成長だけでなく、子どもたちや先生方へ還元できるよう努めて参ります。

佐々木 洋子（南部町立名川小学校）



大学院生活が始まって、何よりも一番に思っていることは、学べる機会をいただいたことに対する感謝の気持ちです。大学の講義はもちろんのこと、他管轄や他校種の先生方、M2の先輩方、ストレート

マスターの方々などたくさんの人たちと関わり、これまで自分にはなかった新しい視点や考え方など学びが多く、充実した日々です。また、共に学び合う仲間ができたことも嬉しく思っています。大学院に送り出していただいたたくさんの方々にも感謝の気持ちを忘れず、たくさんのことを吸収し、パワーアップしたいです。そして、現場に戻った時に子ども達や先生方に還元できるよう学んでいきます。

篠原 英樹（青森市立佃中学校）



学校現場では新年度が始まり、とても慌ただしい日々を過ごしていることと思います。そのような中で、2年間弘前大学教職大学院で学ぶという貴重な機会をいただきありがとうございます。授業が

始まり今までの自分の実践を振り返り、それに加えて新たな知見を得ることができています。この2年間の学びが自分の教職に対する考え方や実践の仕方に大きく関わってくると考えています。学校現場に戻った際には、今まで以上に生徒の可能性を広げられるよう、そして自分で学んだことを多くの場面でアウトプットしていけるよう、積極的に学んでいきたいと思っています。



福田 正道（青森県立八戸第二養護学校）



「現場で指導を行う中で、「より良い支援の在り方」、「生徒の可能性をさらに広げる手立ては何か」と自問することが多くなり、目の前の課題を丁寧に捉え直す力を養いたいと感じるようになりました。

大学院では、教育の理論と実践を往還しながら、様々な視点やアプローチを学び、柔軟で深みのある指導ができるよう研鑽を積んでいきたいと考えています。また、院生の仲間と学び合うことで、協働的に課題解決に取り組む力も高めていきたいと考えています。

常に学び続ける姿勢をもち、大学院で得た知見を現場に還元することを通して、青森県の教育の発展に貢献できる教員を目指します。自らの成長が、子どもたちのよりよい学びと未来につながるよう、誠実に学びを深めていきます。

松浦 里美（青森第一養護学校）



大きく生活が変化してから数週間がたちましたが、まだ不安と緊張の中に身を置いています。新しい環境になったすべての方、いろいろな1年生に勝手に仲間意識をもち、心の支えにしながら日々を過ごしています。

いよいよ始まった教職大学院での学びは、多様な講義内容と情報量の多さ、提出物の多さに、頭を抱えています。新しい知識の獲得や他校種の先生方、ストレートマスターのみなさんの、自分にはない視点の考えは、とても新鮮で、大きな学びとなっています。勤務校の子どもたちや、これから出会う子どもたちと会えることを楽しみに、今日も頑張ります。

三國 里美（青森県立北斗高等学校）



入学して約2週間、毎日新たな学びがあります。ミドルリーダーコースの先生方は校種も様々で、知らない世界や自分とは違った視点の捉え方を知ることができます。ストレートマスターの皆さんの

学習意欲と探求意欲には大変圧倒されています。また私は人文学部出身で教育学についての学びは最

低限だったため、全く新しい研究や実習にワクワクしているところです。専門的な講義にはついていくだけで精一杯ですが、とても刺激的です。

日々の忙しさに追われ毎日をこなすことに精一杯だった現場から一歩離れ、理論をじっくり学んだり自分の実践を丁寧に振り返ったりすることで、教員としての専門性を高めていきたいと思っています。実りある2年間とし、学びを還元できるようにがんばります。

横濱 知愛（東北町立東北中学校）



私はこれまで東北中学校で保健教育への参画や地域連携等、多くの貴重な経験をさせていただきました。一般的には「養護教諭＝保健室で仕事をする」イメージが強いと思いますが、今の私は東北中学

校での経験を経て「保健室を一步出た実践」に興味があります。養護教諭が授業に参画したり、学校運営（保健教育や保健管理）について積極的に関与したり、家庭や地域・医療（専門家）に開かれた学校作りを行うことで、子どもたちの健康の保持増進にどのような効果をもたらすことができるかを教職大学院で主体的・対話的に学びたいと考えています。

学校教育実践・教科領域実践コース

遠藤 佳子（学校教育実践コース）



教職大学院での学びを通じ学部生時代の教育実習等での学びと実践から、一人ひとり様々な背景を持つ子どもへの理解を「チーム学校」として深められるような教員になりたいと考え、本研究科に進学

しました。先生方や先輩をはじめとして、同僚との学び合いを通してより多角的な視点から子どもを捉え、変化の激しい時代を生き抜くための力とは何か、それをどう伸ばしていくのかということについて、自分なりの体幹を強く持てるよう日々の学びを大切にしたいと思っています。



斎藤 広和（学校教育実践コース）



近年、「探究活動」が重要視されていますが、正直に申しますと、「とはいえそれは、（環境や人的資源に恵まれた、或いは特色のある専門学科をもつ）一部の学校にしかでき

ない理想的なもの」というのが、かつての—「探究」が注目されはじめた頃に高校生だった—私の印象でした。しかしながら、昨年、県内のさまざまな高校で実践的かつ有意義な探究が行われていることを現職の先生方からうかがう機会があり、かつての印象は大きく覆され、むしろ探究の興味深さや可能性を実感しました。今後は、効果的な探究の進め方や指導法、探究の過程を教科教育に応用する方法などに焦点を当て、学びを深化していく所存です。

松田 怜紗（学校教育実践コース）



他大学からの進学だったため、不安を抱えながら入学しました。今では、道に迷った時や課題で困っている時に助けてくれる仲間に出会い、幸せだと日々感じています。

この2年間で、私が教員になる意味を確立させ、児童と学び続けることができる教員になれるよう尽力します。特別支援に関する知識を吸収し、現場に自信をもって向かえるよう、大学院での時間を有意義なものにしたいと思います。

将来の自分を助けることができる知識をつけます!! 20人みんなで、良い刺激を与えられる関係になりたいと思います!!

村山 梨玖（学校教育実践コース）



私は、学び続ける教師の体現及び自身のキャリアアップを目標に教職大学院への進学を決めました。学部では味わえないミドルリーダーとの交流や、授業と実習での理論と実践の往還・融合が密に行える環境に魅力を感じて

います。新鮮な知識や視点を毎日得ることができる上、ディスカッションにおいて自分の考えを表出しアップデートできる授業に充実感を覚えます。

教職大学院では学部の研究をもとに、言葉による自己効力感の向上についての実践研究を行いたいです。共に学ぶ仲間と切磋琢磨し合い、確かな実践力や省察力を身につけて自信をもって教壇に立てるよう2年間精進していきます。

渡辺 結衣（学校教育実践コース）



子どもの命と心を守る養護教諭を目指して入学しました。子どもが見せる小さな表情の変化や訴えを的確に読み取り、迅速な判断と対応ができる力を身につけたいと思

います。また、子どもが日常生活の中で授業内容を生かせるような、子どもの生活に根ざした保健の授業とは何かを研究し、実践していきたいと考えています。知識や技術だけでなく、子どもに寄り添う姿勢を大切にしながら、安心して頼れる養護教諭になれるよう努力していきます。

有働 将之（教科領域実践コース）



入学してから2週間、土日も含め毎日院生室に通い詰める生活が続いております。そのくらいこの院生室の居心地は良いのです。ここの魅力ですか？魅力は数多くありま

すが、やはり一番は「仲間の存在」だと思います。教師を目指すという共通の目的を持つ仲間たちがいることで、将来の夢や悩みを自然に共有できる雰囲気があります。さて、ここで私が大学院に入学した目的を語りましょうか。私もかつて“数学アレルギー”に罹患していた一人です。しかし、今では数学を愛しています。私のような数学アレルギーを持つ多くの子供たちのお手伝いができるような授業をこの2年間で作り上げていきたい所存です。



小山内 緋流（教科領域実践コース）



教職大学院での授業も本格的に始まり、学校教育に関する事柄について、見識を深める日々が続いています。私は国語教育における指導の方法について研究するとともに、学校現場で対応できる実務

的能力を身につけたいという思いから、教職大学院への進学を決めました。授業では、現職の先生方と議論する機会も多く、自分にはなかった気づきを得ることができるので、良い学びになっています。今はまだ不安もありますが、2年という月日のなかで、教科指導や生徒指導などの力を徐々に磨き、将来的には実践力に長けた教員になれるよう、頑張ります。

相馬 龍乃介（教科領域実践コース）



私は、弘前大学の教育学部・小学校コースから、自身の授業実践に関して不安が多くあったこと、専門分野の知見を深めたいことを理由に進学しました。学部では、高等学校における「公共」と「倫理」について主に学習していましたが、教育学につ

いての知見はやはり浅く、哲学に関する学習も満足とは言えませんでした。教職大学院ではストマスの方々と高め合うだけでなく、ミドルの先生方とも学ぶことができます。この機会を存分に活用し、自身の教職に対する知見を広げ、理論と実践を融合して現場を目指したいと思います。「人の知に限りなし」。

武田 遼（教科領域実践コース）



大学院に進学し、生活にも大分慣れてきました。私は仲間とディスカッションをしたり本を読んだりして何かしらのテーマについて考えることが好きです。教職大学院にはそのような形式の講義が多く

あり、楽しく充実した学びを得ることができていると感じています。まだ学生という立場で学ばせてもらっているという贅沢に感謝し、この環境を存分に活用して社会に対して何かを与えることができるように、そして自らの知的好奇心を存分に満たすことができるように教職大学院の2年間で充実したものにしたいと思っています。

羽場 匠洋（教科領域実践コース）



私は、北海道教育大学函館校から弘前大学教職大学院に進学いたしました。青森県出身で、令和7年度青森県教員採用試験の合格をいただいております。しかし、学部の際に行った教育実習で力量不足

を痛感し、本学の理論と実践の往還・融合を通してさらにレベルアップしていこうと考えました。教職大学院では、学校現場での実習を通し実践力を身に付け、さらに、数学科における「個に応じた指導」を軸に研究を行い、これからにつなげていきたいと思っています。

これから2年間を通して経験するたくさんの貴重な学び・機会に感謝し、教師としての力量を上げていきます。

福岡 寛丈（教科領域実践コース）



これまでは教育とは違うことを学んでいましたが、将来教師として働きたいと思い教育に関する基礎知識や実践力を身に付けるために教職大学院に進学しました。慣れない環境なので緊張することが多

いと思いますが吸収することも多いと思っているので精一杯頑張っていきたいと思っています。子どもたちが何事にも疑問を持ち、自分の意見や考えを持てるような授業づくりができるように実践研究をしたいと思っています。また自分の意見や考えを他人にうまく伝えられるようになってもらうために、自分が相手にうまく伝えられるようになろうと思います。



「学校リスクを俯瞰する」

「教育実践研究発表会」(年次報告会・最終報告会) 実施 一県内外からの多数の御参加に感謝一



令和7年2月10日(火)、青森県総合学校教育センターをお借りし、「対面」と「オンライン」併用による「教育実践研究発表会」を実施しました。県外からのオンライン参加者も含めると、総勢200名以上での開催となりました。

1年次院生にとっては今回が初めての発表会でした。1年次院生は、この発表会に至るまで、研究の意義、リサーチクエスションの立て方、研究倫理、エスノグラフィーとその技法等、研究の進め方を段階的に学んできました。そして、夏から秋にかけて研究テーマを絞り込み、授業実践や勤務校実習を通して仮説を検証、成果や改善点を明らかにした上で臨みました。



2年次院生は、1年次の成果や課題から仮説の修正等を行い、実践研究を進めました。定期的に行う個別ゼミや全体ゼミにて様々な視点から意見をもらい、11月上旬には「中間報告会」を行いました。そこで明らかになった課題を基にさらに実践研究を進め、2年間の集大成である「最終報告書」としてまとめました。2年次院生が今回発表したのは報告書にまとめられた内容になります。

また、当大学院には、学部卒院生と現職教員院生が在籍していますが、研究テーマについては、学部卒院生が個人の実践研究を主としているのに対して、現職教員院生は同僚との協働的な取組を視野に入れた実践研究が多くなっています。これは、現職教員院生の属するコースがミドルリーダーの養成を企図しているためでもあります。ここでの研究が実際の教育活動により効果的に寄与することを願っております。

最後に、今回の教育実践研究発表会に際し、ご挨拶いただきました県教育委員会教育長風張知子様、現場の目線でご助言・ご講評くださいました弘前市立東中学校校長 古川和生様、青森市立甲田町中学校校長 大友啓文様、青森市立浪館小学校校長 須藤香代子様、弘前大学教育学部附属特別支援学校校長 川口晃世様、院生に多くの気付きと励ましをくださった県教育委員会の皆様、発表を支援してくださった県総合学校教育センターの皆様にご心から感謝を申し上げます。

旅立ちの日に一送別会(3月24日)一

M1 院生が企画

差し交わされた手と手のアーチをくぐって、退職教員と修了生が入場。大学院で過ごしたそれぞれの日々への思いが、時に涙を交えながら語られ、やがて会場は、「旅立ちの日に」の合唱に包まれました。



2025中間報告会・教育実践研究発表会

①中間報告会

11月1日(土)

会場：弘前大学教育学部

②教育実践研究発表会

2月10日(火)

会場：青森県総合学校教育センター
※いずれも対面・オンライン併用。

〈編集・発行〉

弘前大学 大学院教育学研究科
教職実践専攻(教職大学院)

〒036-8560

青森県弘前市文京町1番地

Tel: 0172-36-2111(代表)

メールアドレス: k-daigaku01@hirosaki-u.ac.jp